天　界

第百十一號　（第十卷）　昭和五年七月

我が學界に望ましき事ども　（其の一）

〔卷　頭　言〕

我が國の天文學界が「外國のそれ等に比べて，とても御話にならない貧弱さである」と，今までよく先輩たちからも聞かされ，又，實際そんな氣がしてならなかつたものであるが，しかし最近の事狀を見ると．必ずしも左樣でない．器械や天文臺も可なり增したし，又，人も增した．——殊に此の「學界の人が增した」といふことは實に驚くべき勢を示し，例へば，東京でも京都でも，帝國大學の天文學科は，每年々々定員以上の入學志望者を見，又，新しく生れ出る天文學專攻の理學士も，殆んど三人乃至五人づつあるといふ景況であつて，こんな事は外國の大學にも全く例の無いことである．

今や東西の官公立天文臺や其の他種々の學府に天文學の研究をこととしてゐる人士は恐らく百名に達するだらう．しかるに，こゝに不思議な事實は，これほどの人士が活躍してゐる我が國內に，總括的に學界の權威を網羅する學會が一つも無いことである．尤も，東京には日本天文學會あり，京都には天文同好會があるけれど，之れは何れも創立當初から明らかに天文學の通俗會であつて，嚴密に研究を目的とする學會とは言ひ得ない．たゞ僅かに日本數學物理學會の一部に，天文研究者が含まれてゐることと，京都天文學會といふ一部人士の會があるばかりであるのは，いかにも淋しい．由來，東洋古來の學風は，學者が皆互ひに孤立して研究に專心する事例のみを殘してゐるものだから，今日と雖も，學內學外の人々は多く學者の組合や會合組織を第二義的なものと解し，あへて重きを置かない傾向が

ある．しかし之れは非常な愚見であつて，近代の學術は個々の學究者の孤立や，抜けがけの功名を許さない．是非にも，學者相互の社會的連絡によつて進まなければならないものがある．天文學は殊に此の必要が痛感せられる．望むらくは，一日も早く我が國に，かの英國のローヤル天文學會の如き，又，米國のアメリカ天文學會の如き，獨國天文ゲゼルシャフトの如きものが組織されんことを．——西洋諸國に早くより學會組織の發達してゐるのを見て，畢竟之れ外國人の社交癖の表はれのみとするは，短見者の言ひ分に過ぎない．

花山だより

暫く御無沙汰をしてゐましたが，花山も，年初から種々面白い事があります．まづ，二月頃から，本館と子午線館の間に陸軍の二等三角點の高塔が組み上げられました．高さは17米，大ドームの上に聳えて居ます．三月末に英國からシンクロノーム會社製の最新式標準時計が到着．其の自由時計は本館地下の時計室に，又，副時計の方は子午儀室に据え付けられました．四月からは高城，宮澤，古川三君が志願助手として來られ，又，柴田氏も花山で多くの時を費されるやうになりました．目下，本館露臺と太陽館屋上とに多少模樣換へ工事が進行中です．之れが出來上つたら一層人々を惹きつけませう．五月から六月初まではシワスマン彗星觀測のため天文臺は異常の緊張を見せましたが，梅雨に入つて靜かになりました．超海王星は中村渡邊兩氏によつて寫眞觀測が行はれました．近いうちに海軍省から寄贈された潜望鏡が，本館の屋上に据え付けられます．之は又可なり人氣を呼ぶことになりませう．46センチ大反射鏡も愈々調節が終り，觀測に使用されるやうになりました．門には門燈が置かれ，移動觀測室の附近には見事な柵が作られました．門から玄關までの豫定道路は目下豊田君の手で作られてゐます．